



## 2025年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕（非連結）

2025年2月12日

上場会社名 株式会社フルッタフルッタ 上場取引所 東  
コード番号 2586 URL <https://www.frutafruta.com/>  
代表者 (役職名) 代表取締役社長執行役員CEO (氏名) 長澤 誠  
問合せ先責任者 (役職名) 管理部 (氏名) 野呂 広利 TEL 03-6272-3190  
配当支払開始予定日 —  
決算補足説明資料作成の有無：有  
決算説明会開催の有無：無

(百万円未満切捨て)

### 1. 2025年3月期第3四半期の業績 (2024年4月1日～2024年12月31日)

#### (1) 経営成績 (累計)

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
2025年3月期第3四半期	1,761	110.4	142	—	145	—	118	—
2024年3月期第3四半期	837	47.3	△224	—	△244	—	△244	—

	1株当たり 四半期純利益	潜在株式調整後 1株当たり 四半期純利益
	円 銭	円 銭
2025年3月期第3四半期	2.31	1.53
2024年3月期第3四半期	△2.51	—

(注) 1. 2024年3月期第3四半期累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり四半期純損失金額であるため記載しておりません。

#### (2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
2025年3月期第3四半期	2,902	2,605	89.7	39.22
2024年3月期	1,644	975	59.1	24.99

(参考) 自己資本 2025年3月期第3四半期 2,604百万円 2024年3月期 973百万円

### 2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2024年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2025年3月期	—	0.00	—	—	—
2025年3月期 (予想)	—	—	—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無：無

### 3. 2025年3月期の業績予想 (2024年4月1日～2025年3月31日)

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり 当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
通期	2,300	174.7	130	—	130	—	130	—	2.30

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無：有

※ 注記事項

(1) 四半期財務諸表の作成に特有の会計処理の適用：無

(2) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無
- ② ①以外の会計方針の変更 : 無
- ③ 会計上の見積りの変更 : 無
- ④ 修正再表示 : 無

(3) 発行済株式数（普通株式）

① 期末発行済株式数（自己株式を含む）	2025年3月期3Q	66,417,789株	2024年3月期	38,937,789株
② 期末自己株式数	2025年3月期3Q	3株	2024年3月期	1株
③ 期中平均株式数（四半期累計）	2025年3月期3Q	51,483,607株	2024年3月期3Q	32,923,271株

※ 添付される四半期財務諸表に対する公認会計士又は監査法人によるレビュー：無

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料P. 6「1. 当四半期決算に関する定性的情報（3）業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

(参考) 種類株式の配当の状況

普通株式と権利関係の異なる種類株式に係る1株当たり配当金の内訳は以下のとおりであります。

A種類株式	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
2024年3月期	—	0.00	—	0.00	0.00
2025年3月期	—	0.00	—		
2025年3月期(予想)				0.00	0.00

## ○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報 .....	2
(1) 経営成績に関する説明 .....	2
(2) 財政状態に関する説明 .....	6
(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明 .....	6
2. 四半期財務諸表及び主な注記 .....	7
(1) 四半期貸借対照表 .....	7
(2) 四半期損益計算書 .....	8
第3四半期累計期間 .....	8
(3) 四半期財務諸表に関する注記事項 .....	9
(継続企業の前提に関する注記) .....	9
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記) .....	11
(四半期キャッシュ・フロー計算書に関する注記) .....	11
(セグメント情報等の注記) .....	11
3. その他 .....	12
継続企業の前提に関する重要事象等 .....	12

## 1. 当四半期決算に関する定性的情報

## (1) 経営成績に関する説明

当第3四半期累計期間におけるわが国経済は、各種政策による雇用・所得環境の改善への期待とインバウンド需要に支えられ、穏やかな回復基調の継続がみられた一方で、円安の進行や原材料価格の上昇等に起因する物価の上昇に実質賃金の上昇が追い付かず、日常生活における慎重な購買姿勢は一層強まっております。

食品製造及び食品小売業界におきましても、円安や原材料価格の高騰を背景に食品価格の値上げが継続的に実施されており、消費者の経済的負担の高まりによる消費低迷が懸念される等、依然として先行き不透明な状況が続いております。

このような状況の中、当社が事業を展開するアサイーの国内需要は引き続き盛り上がりを見せており、当第3四半期においても顕著に表れております。「アサイーボウル」が多くメディアに取り上げられ、around20（15～24歳）を対象とした調査によるトレンド大賞では女性部門では1位、男性部門においても2位受賞や、2024年ヒット商品ベスト30にもランクインするなど高い関心が寄せられています。この背景には、若者世代の健康やダイエット意識の高まりがあり、「ギルトフリー」「ノーギルティ」というコンセプトの健康志向とストレスフリーな食事が注目されていることが関連すると予想されます、見た目に鮮やかなことが関心の始まりであった顧客が、以前からスーパーフードとして注目されていたアサイーの健康価値にも注目をしたことでヘルシーな食体験を求める価値観と合致し、日常的な食事へと取り入れられ始めたと考えられます。

結果として、当第3四半期も売上高は増収、利益面は増益し黒字幅の拡大を達成しております。

(単位：千円)

	前第3四半期累計期間 (自2023年4月1日 至2023年12月31日)	当3四半期累計期間 (自2024年4月1日 至2024年12月31日)	増減額	増減率
売上高	837,259	1,761,241	923,981	110.4%
売上原価	578,164	1,112,214	534,050	92.3%
売上総利益	259,094	649,026	389,931	150.4%
販売費及び 一般管理費	483,914	506,139	22,225	4.5%
営業利益又は 営業損失(△)	△224,819	142,887	367,706	—
経常利益又は 経常損失(△)	△224,880	145,932	390,812	—
四半期純利益又は 四半期純損失(△)	△224,103	118,958	363,061	—

	(参考)		(単位：千円)	
	前第3四半期会計期間 (自2023年10月1日 至2023年12月31日)	当3四半期会計期間 (自2024年10月1日 至2024年12月31日)	増減額	増減率
売上高	261,073	633,494	372,421	142.6%
売上原価	194,558	381,482	186,923	96.0%
売上総利益	66,514	252,012	185,497	278.8%
販売費及び 一般管理費	146,688	189,119	42,431	28.9%
営業利益又は 営業損失(△)	△80,173	62,892	143,065	—
経常利益又は 経常損失(△)	△87,708	79,756	167,465	—
四半期純利益又は 四半期純損失(△)	△86,456	64,699	151,156	—

第3四半期会計期間(2024年10月1日～2024年12月31日)においては、売上高633,494千円(前年同期比242.6%)、売上総利益252,012千円(前年同期比378.8%)、営業利益は前第3四半期会計期間より143,065千円増加し62,892千円となり、売上高の増収および営業利益の増益による黒字幅の拡大を達成しております。円安などの影響により売上原価が上昇する中、販売費及び一般管理費を一定の水準に留めることや為替影響を最小限にする施策の実施に成功した結果、利益体質へ転換しております。

売上高はアサイー関連商品の好調により、前年同期比242.6%と伸長し、売上・利益共に大きく貢献しております。メイン消費者と考えられるZ世代によって、新しい要素を加えつつ進化を遂げ拡大していると見込まれ、国内外食店舗でのアサイー需要増加およびアサイーを自宅で日常的な食事とすることでさらに需要が増加し、リテール事業、業務用事業、DM事業のいずれの部門においても大きく伸びを示しました。

当社商品ラインナップは冷蔵、冷凍品が中心となっており、例年第3四半期ではカテゴリーの季節指数に比例して売上が鈍化する傾向にありましたが、当第3四半期はその傾向はなく伸長しております。

また、当社商品へCO<sub>2</sub>削減マーク記載をしていたことにより、これまでの採用事例とは異なる外食ジャンルであるコロナイドグループが運営するかっぱ寿司にて販売されたサステナブルなスイーツへ当社アサイーが採用されております。その他、株式会社ロック・フィールドが運営するジューススタンドのベジテリアや、株式会社すかいらーくレストランツが運営するファミリーレストランのジョナサン、他多数の企業で採用が進み、サステナブルフードとしてCO<sub>2</sub>削減に対する意識の高まり及び当社事業の根幹であるアグロフォレストリーに対する関心が高まっていることがうかがえます。

このような需要増加を見せた中、昨年の原料不足の反省から大幅増量にて実施した2025年度向け新規調達完了し、新規収穫のアサイー原料が徐々に国内へ到着しており、商品供給量の回復、在庫の確保が進んでおります。

安定供給体制の強化を図り、今後も主力商品であるアサイーの拡販と事業の根幹であるアグロフォレストリーの2つを軸に、国内需要を確実に捉え続け拡大を実現してまいります。

売上原価においては、前第3四半期会計期間より186,923千円増加(前年同期比196.0%)となりました。

円安市況下でも、当社事業に有利となる為替レートでの資金の事前確保や、アサイーパウダーやスムージーなどの付加価値の高い商品の提案強化を実施することで、今後も為替影響を最小限に抑え、適正な売上総利益の確保に努めてまいります。

販売費及び一般管理費につきましては、前第3四半期会計期間より42,431千円増加(前年同期比128.9%)となりました。

売上高増加に伴い物流コスト(倉庫料、荷造運賃発送費)が62,310千円発生し、前第3四半期会計期間より46,017千円増加となっておりますが、物流・運送業界の2024年問題やエネルギー価格高騰によるコストの上昇が続く中でも、効率的な輸送ルートや手段の確保および在庫回転の管理によって合理化を図れるコストはコントロールに注力し、売上高比率に対して一定の率内で抑えることができております。

以上の結果、当第3四半期会計期間の営業利益は62,892千円(前年同期は営業損失80,173千円)、経常利益は79,756千円(前年同期は経常損失87,708千円)、四半期純利益は64,699千円(前年同期は四半期純損失86,456千円)となりました。

事業部門別の売上高は次のとおりであります。

なお、当社は輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(単位：千円)

	前第3四半期累計期間 (自 2023年4月1日 至 2023年12月31日)	当第3四半期累計期間 (自 2024年4月1日 至 2024年12月31日)	増減率
リテール事業部門	423,404	730,412	72.5%
業務用事業部門	291,826	780,223	167.3%
DM事業部門(注)	110,529	238,519	115.7%
海外事業部門	11,499	12,085	5.1%
合計	837,259	1,761,241	110.3%
(注) ダイレクトマーケティング事業部門			

#### ①リテール事業部門

当第2四半期で最大売上部門へ成長した業務用事業部門の売上高と再度同水準まで伸長し増収となりました。アサイーを自宅で日常的に摂取するおうち需要の拡大や、健康効果が再認識されたことも相まって健康的なライフスタイルとしての需要増加が要因であると考えられます。

スーパーマーケットを中心とした小売店については、フルッタアサイーシリーズや、冷凍ピューレに加え、お家でアサイーボウルなど、アサイー関連商材が全体的に好調に推移し、売上高、売上総利益に大きく貢献しました。中でも、冷凍アサイーピューレ、お家でアサイーボウルにおいては、冷凍品のアプローチ・拡販を強化する戦略により、市場の盛り上がりの後押しもあり、小売業からの問い合わせも多く、露出面が拡大しております。

今後も継続して既存品の露出強化を図ると共に、現状のパウチタイプの商品だけでなく、よりお客様の利便性を追求したお家でアサイーシリーズのフラッグシップモデルとなるカップ入りアサイーボウルの『お家でアサイーボウルプレミアム』に続く新商品を計画しております。

コンビニでは10月中旬よりファミリーマート全国の店舗にて『果肉を楽しむブルーベリーミルク』が発売され、製品パッケージには、アサイーが栽培されているアグロフォレストリー農法のCO<sub>2</sub>吸収量を1製品あたりの削減量として換算した「CO<sub>2</sub>削減マーク」が表示されており、他社の飲料製品で当社のCO<sub>2</sub>削減マークが採用された初の事例となりました。

また、12月上旬より特濃スムージーの「フルッタアサイーエナジー720g」を新パッケージに順次移行し、目の届きやすい正面上部と側面に本製品を使用したアサイーボウルなどのレシピ画像を配置いたしました。秋冬にはアサイーとヨーグルトの組み合わせを積極的に提案し、クロスセルの販売を実現させるべく「飲む」だけでなく「食べる」目的でも家庭で簡単にアサイーを楽しめることを訴求し、さらにアサイーを日常の中に取り入れる動きを加速させる取り組みを行ってまいります。

この結果、リテール事業部門全体における当第3四半期累計期間の売上高は730,412千円(前年同期比172.5%)となりました。

## ②業務用事業部門

外食向け原料販売では、主にアサイーボウルやスムージーのベースとして活用されている冷凍ピューレやアサイーグロッソアイスなどの商品が、大手カフェチェーンやレストランチェーンに採用されたことで、前年同期比197.3%となりました。個店向けの業務用通販サイトBIZWEBにおいても依然として広がりを見せており、新規登録顧客数は増加を続けている結果、前年同期比199.3%と大きく伸長しています。

当第3四半期ではコロナグループが運営するかっぱ寿司にて販売されたサステナブルなスイーツや、株式会社ロック・フィールドが運営するジューススタンドのベジテリア、株式会社すかいらくレストランズが運営するファミリーレストランのジョナサン、株式会社FOUR SEEDS FOODS EXPRESSが運営するハワイアンテイストのグルメバーガー&サンドウィッチレストラン「クア・アイナ」、他多数の企業で当社の濃厚なアサイーを使用したメニュー採用が進んだことも業務用事業の伸長に大きく貢献しております。ブランドコンセプトとの親和性の高さから継続採用に至る事例もあり、サステナブルフードとしてCO<sub>2</sub>削減に対する意識の高まり及び当社事業の根幹であるアグロフォレストリーに対する関心が高まっていることがうかがえます。

大・中規模の新規企業様に対しても、営業部とメニュー開発部の連携をより密接にし、アサイーやアマゾンフルーツを活用したメニュー提案など積極的なアプローチを行っており、今後も店舗でのオペレーション効率と品質・味の安定を考慮し、より使いやすい商品を開発のみならず、アサイーのパイオニアとして各店舗での活用方法を拡大させるメニュー・販促提案を提供することで、業務用の新たな軸を確立させてまいります。

メーカー向け原料販売については、売上高前年同期比△19.7%となりますが、当第3四半期会計期間の前年同期比では117.9%と伸長しております。アサイー5倍濃縮エキスを、フリーズドライパウダーなど付加価値型原料をメインとする部門であり、メーカー市場は外食の次に拡大する性格のため、今後の売上高伸長が期待できます。

近年、環境意識の高まりとともに持続可能な食品や、エシカル消費に対する関心が増加している中、アグロフォレストリー産原料は、アマゾン熱帯雨林の保護と現地地域社会の経済支援につながっているとされ、エシカルな選択として支持されています。特にZ世代の間で高まる、環境に配慮しながら健康的な食品を選びたいという要求が高まっていることでサステナブル原料に関する問い合わせは増加しており、「CO<sub>2</sub>削減量マーク」を強みの一つとして、近年特に重要な課題となっている「責任ある調達(サステナブル調達)」に対応した付加価値型原料のさらなる展開に向けて取り組みを行ってまいります。

この結果、業務用事業部門の当第3四半期累計期間の売上高は、780,223千円(前年同期比267.3%)となりました。

## ③ダイレクトマーケティング(DM)事業部門

ECチャンネルにおいては、アサイーの盛り上がりにおける火付け役となったZ世代の購入チャンネルとして、当第3四半期も自社ECにおいては売上高前年同期比484.4%となり好調に推移しております。一部商品においては、出荷制限を設けながらの販売となっておりますが、原材料調達が済み、供給体制が整ったことで、当第4四半期以降においては安定供給によってさらなる販売拡大が見込まれます。

自社ECサイトにて先行発売を開始したわかりやすいネーミングからも消費者に親しまれ、お家でシリーズ大ヒット商品である「お家でアサイーボウル」を7日間セットにした「お家でアサイーボウル7パック」が売上高を牽引し、アサイーが生活の中に入り込み、日常的な食品となりつつあることを感じられる結果となりました。

また、お家でシリーズの中でアサイーと並ぶ姉妹品である「お家でピタヤボウル」も、色素の一種のベタシアニンが多く含まれているため色彩鮮やかで視覚的にも楽しむことができ、α-トコフェロールよりもベタシアニン類の方が高い抗酸化作用を示したという報告があるほど、健康効果が期待される注目商品となり、売上高前年同期比565.5%となりました。

この結果、ダイレクトマーケティング事業部門全体の当第3四半期累計期間の売上高は238,519千円(前年同期比215.7%)となりました。

## ④海外事業部門

海外事業部門に関しては、今シーズンは全世界的なカカオ豆原料の不足や、カカオ先物価格が過去最高を更新し高騰する上昇基調の状況となっておりますが、当社のカカオビジネスはCO<sub>2</sub>削減量の観点からも大きな役割を担っているため、当社の特徴である現地生産者と直接繋がっているという利点を活かし、引き続きCAMTAと協力しながら安定的な供給に向けて取り組んでまいります。

また、近年、次世代型食料供給産業に注目が集まる中で、近い将来、アグロフォレストリーが国際機関の目指す「温暖化ガス削減」や「ネイチャーポジティブ」の数少ない成功事例となり得ることを鑑み、アグロフォレストリーを中心としたサステナブルマッチングプラットフォーム化に向けた取り組みを進めており、2025年11月のCOP30に向けて、要件定義の策定を進めております。当社にしかできないソリューションを提供することで、売上拡大を図ってまいります。

この結果、海外事業部門の当第3四半期累計期間の売上高は、12,085千円（前年同期比105.1%）となりました。

## (2) 財政状態に関する説明

### ①資産、負債及び純資産の状況

当第3四半期会計期間末における総資産は、前事業年度末に比べ1,258,409千円増加したことで、2,902,961千円となりました。この主な要因は現金及び預金が1,250,537千円及び棚卸資産が274,812千円増加したこと等によるものであります。

当第3四半期会計期間末における負債は、前事業年度末に比べて371,394千円減少したことで、297,391千円となりました。この主な要因は仕入債務が121,491千円減少したこと等によるものであります。

当第3四半期会計期間末における純資産は、前事業年度末に比べて1,629,803千円増加したことで、2,605,580千円となりました。この主な要因は四半期純利益118,958千円の計上に加え、資本金及び資本準備金がそれぞれ743,588千円増加したこと等によるものであります。

## (3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明

2025年3月期の業績予想につきましては、最近の動向及び今後の見通し等を勘案し、2024年11月13日付『2025年3月期業績予想の修正に関するお知らせ』でお知らせした業績予想を修正しております。

なお、詳細につきましては、2025年2月12日公表の「2025年3月期業績予想の修正に関するお知らせ」をご確認ください。

## 2. 四半期財務諸表及び主な注記

## (1) 四半期貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (2024年3月31日)	当第3四半期会計期間 (2024年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	377,724	1,628,261
売掛金	198,633	311,419
商品及び製品	244,542	361,767
原材料及び貯蔵品	131,300	288,888
その他	63,335	247,679
流動資産合計	1,015,536	2,838,016
固定資産		
投資その他の資産		
投資有価証券	565,352	—
その他	63,663	64,945
投資その他の資産合計	629,016	64,945
固定資産合計	629,016	64,945
資産合計	1,644,552	2,902,961
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	290,085	168,594
1年内償還予定の社債	300,000	—
未払法人税等	6,858	40,007
その他	68,075	85,016
流動負債合計	665,020	293,619
固定負債		
資産除去債務	3,755	3,762
固定負債合計	3,755	3,762
負債合計	668,775	297,381
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	1,047,795	1,791,384
資本剰余金	1,174,752	1,918,341
利益剰余金	△1,223,957	△1,104,999
自己株式	—	0
株主資本合計	998,590	2,604,725
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	△25,429	—
評価・換算差額等合計	△25,429	—
新株予約権	2,615	854
純資産合計	975,777	2,605,580
負債純資産合計	1,644,552	2,902,961

(2) 四半期損益計算書  
(第3四半期累計期間)

(単位：千円)

	前第3四半期累計期間 (自 2023年4月1日 至 2023年12月31日)	当第3四半期累計期間 (自 2024年4月1日 至 2024年12月31日)
売上高	837,259	1,761,241
売上原価	578,164	1,112,214
売上総利益	259,094	649,026
販売費及び一般管理費	483,914	506,139
営業利益又は営業損失(△)	△224,819	142,887
営業外収益		
受取利息	1	43
為替差益	—	23,450
助成金収入	1,587	—
その他	183	268
営業外収益合計	1,772	23,761
営業外費用		
支払利息	16	1,389
社債利息	2,219	197
為替差損	10,303	—
資金調達費用	9,294	17,452
投資有価証券売却損	—	1,677
営業外費用合計	21,833	20,716
経常利益又は経常損失(△)	△244,880	145,932
特別利益		
新株予約権戻入益	1,489	—
特別利益合計	1,489	—
税引前四半期純利益又は 税引前四半期純損失(△)	△243,390	145,932
法人税、住民税及び事業税	712	26,974
四半期純利益又は四半期純損失(△)	△244,103	118,958

## (3) 四半期財務諸表に関する注記事項

## (継続企業の前提に関する注記)

当社は、前事業年度末において、継続して営業損失、経常損失、当期純損失及び営業キャッシュ・フローのマイナスを計上しており、継続企業の前提に関する重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在していません。

今後、当社は以下の対応策を講じ、当該状況の改善及び解消に努めてまいります。

## i. 成長するアサイー市場に向けた取り組み

アサイーの世界市場規模は2023年時点で約10億米ドルと評価されており、約12.5%の年平均成長率で成長し、2036年までに約40億米ドルに達すると予測されています。中でも、特にアジア太平洋地域におけるアサイーの市場規模は、大幅な成長が予測されており、2036年末までに最大10億米ドルの市場規模に達すると予想されています。成長に寄与する主な要因は、政府の支援政策に支えられたヘルスケア及び製薬分野の急速な拡大です。(注1) また、日本市場においても、近年のコロナ禍を経て、アサイーの健康価値が再注目され、アサイー市場の再活性の兆しが見えてきていると考えております。当社は、日本におけるアサイーを用いた事業の先駆者として、日本国内におけるさらなる拡大はもちろんのこと、今後はアジアを中心とした世界に向けて、アサイーを中心としたアマゾンフルーツの健康価値の啓蒙普及活動を行うとともに、アサイーを中心としたアマゾンフルーツの原料・製品を販売していき、アジアにおけるメインプレイヤーとなることを目指します。

(注1) 「世界のアサイーベリー市場に関する調査レポート：予測2024-2036年」 SDKI, Inc.

## ii. アサイー機能性研究

当社は前述の市場成長の中で、お客様にアサイーの価値を理解し、生活の一部として継続的に消費してもらうため、アサイーの機能性研究を継続しております。アサイーの造血機能研究においては、今までの研究結果で得られた価値を機能性表示として多くのお客様へ認知していただくため、臨床実験、原因物質の特定、特許化へ向けた取り組みを進めております。また、世界では、アサイー機能性研究としては、上記造血機能性だけでなく、新型コロナウイルス(COVID-19)に感染した患者の細胞内に生じるNLRP3誘発性炎症の重症化をアサイーで抑制し得るかの臨床研究をはじめとした、様々な研究が実施されています。当社は、豊富な栄養素を含みスーパーフードとして認知されるアサイーの様々な機能を解き明かし、付加価値として積極的に情報公開していくことで、アサイーをより手に取っていただける商品へと進化させてまいります。

## iii. 成長するサステナブル関連市場に向けた取り組み

SDGsに関連した持続可能なビジネスモデルによりもたらされる経済的機会は2030年までに年間最高12兆ドルとなり、3億8千万人分の雇用を創出する可能性があるとも考えられています。(注2) その中でも当社の事業に関連する食品については、2023年時点のエシカル食品の世界市場の規模が約4,502億ドル(約63兆円)となっており、今後も成長を続け、2030年には7,294億ドル(約102兆円)に達する見通しとなっています。(注3)

国内のサステナブルフードの市場規模においても、2021年時点で1兆6,104億円(前年比13.7%増)と推計されています。今後もサステナブルフード市場の成長は続くと思われており、2030年には2兆6,556億円~6兆円の規模に達すると見込まれています。(注3, 4)

当社は創業から20年間、アグロフォレストリーの多様性を活かしたマーケティング活動を継続して行ってきました。特に近年、次世代型食料供給産業に注目が集まる中で、近い将来、アグロフォレストリーが国際機関の目指す「温暖化ガスの削減」や「ネイチャーポジティブ」の数少ない成功事例となり得ることを鑑み、アグロフォレストリーを中心としたサステナブルマッチングプラットフォーム化に向けた取り組みを進めてまいります。

(注2) 「よりよきビジネスよりよき世界(Better Business, Better World)」ビジネス&持続可能開発委員会(Business & Sustainable Development Commission)

(注3) 「消費をのみ込むエシカルの波」日経ビジネス

(注4) 「SDGs社会に向けて変革するサステナブルフード市場の現状と将来予測」富士経済グループ

iv. 黒字化へ向けた事業部門別取り組み

・リテール事業部門

好調に推移しているアサイー関連商材のさらなる販路拡大に加え、製品へCO2削減マーク記載を武器として、定番採用増に繋げてまいります。

・業務用事業部門

外食向け原料販売については、アサイーの代替肉における血液代替原料となり得る価値の訴求を武器として、成功事例を積み上げてまいります。メーカー向け原料販売については、造血機能研究をフックとして、健康食品向け原料への新規採用を図ってまいります。

・DM事業部門

販売チャネルごとの役割を明確にし、自社ECにおいてはチャネル特性に合った新商品の開発や、CO<sub>2</sub>削減量可視化の取り組みの強化など、価格に左右されにくい当社独自の価値提供により、EC市場全体での拡売・収益確保に取り組んでまいります。

・海外事業部門

引き続きCAMTAと協力しながら増産に向けて取り組んでいくと共に、アグロフォレストリーを中心としたサステナブルマッチングプラットフォーム構築に向けた取り組みを進めてまいります。

v. 財政基盤の安定化について

アサイー原材料の資金化と売上拡大で資金確保を図るとともに、新株予約権の行使等も含めた資本政策により財務基盤の安定化に取り組んでまいります。

以上の施策を実施するとともに、今後も引き続き有効と考えられる施策につきましては、積極的に実施してまいります。

しかしながら、今後の利益体質への変革を目指した、売上や収益性の改善のための施策の効果には一定程度の時間を要し、今後の経済環境にも左右されることから、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。

なお、当社の四半期財務諸表は継続企業を前提として作成しており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響は四半期財務諸表に反映しておりません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

## ①発行済株式の種類及び総数に関する事項

	当第3四半期累計 期間期首株式数 (株)	当第3四半期累計 期間増加株式数 (株)	当第3四半期累計 期間減少株式数 (株)	当第3四半期累計 期間末株式数 (株)
発行済株式				
普通株式(注)	38,937,789	27,480,000	—	66,417,709
A種種類株式	2,073	—	—	2,073
合計	38,939,862	27,480,000	—	66,419,862

(注) 新株予約権の権利行使により27,480,000株増加しております。この結果、当第3四半期累計期間において資本金及び資本準備金がそれぞれ743,588千円増加し、当中第3四半期会計期間末において資本金及び資本準備金がそれぞれ1,791,384千円となっております。

## ②新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株) (注) 1				当第3四半期累計期間末残高(千円)
			当第3四半期累計期間期首	当第3四半期累計期間増加	当第3四半期累計期間減少	当第3四半期累計期間期末	
提出会社	2023年第11回新株予約権(注) 2	普通株式	14,000,000	—	14,000,000	0	0
	2023年第12回新株予約権	普通株式	18,240,000	—	—	18,240,000	547
	2023年第13回新株予約権	普通株式	18,240,000	—	—	18,240,000	164
	2023年第14回新株予約権	普通株式	18,700,000	—	—	18,700,000	112
	2023年第15回新株予約権(注) 2	普通株式	18,700,000	—	13,480,000	5,220,000	31
合計	—	—	87,880,000	—	27,480,000	60,400,000	854

(注) 1. 目的となる株式の数は、新株予約権が権利行使されるものと仮定した場合における株式数を記載しております。  
2. 2023年第11回及び第15回新株予約権の当第3四半期累計期間減少は、新株予約権の権利行使によるものであります。

(四半期キャッシュ・フロー計算書に関する注記)

当第3四半期累計期間に係る四半期キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。なお、第3四半期累計期間に係る減価償却費(のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。)は、次のとおりであります。

	前第3四半期累計期間 (自 2023年4月1日 至 2023年12月31日)	当第3四半期累計期間 (自 2024年4月1日 至 2024年12月31日)
減価償却費	—千円	—千円

(セグメント情報等の注記)

## 【セグメント情報】

I 前第3四半期累計期間(自 2023年4月1日 至 2023年12月31日)

当社は、輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

II 当第3四半期累計期間(自 2024年4月1日 至 2024年12月31日)

当社は、輸入食品製造販売事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

### 3. その他

継続企業の前提に関する重要事象等

P. 9「2. 四半期財務諸表及び主な注記(3) 四半期財務諸表に関する注記事項(継続企業の前提に関する注記)」に記載の通りです。